

ネヘミヤ記 9章 6-15 節

使徒言行録 6章 1-9 節、7章 2 節 a、51-60 節

ヨハネによる福音書 10章 1-10 節

もうすぐ4月が終わりますが、過ごしやすい日々が続くようになりました。真っ赤なバラをはじめ、教会庭の花々も次々ときれいに咲いています。ご近所でもマスクをしないで外出される方も見られ、少しずつ日常が戻りつつあるように思えます。

さて、本日の旧約日課は、「ネヘミヤ記」です。「ネヘミヤ記」は、バビロン捕囚後、紀元前5世紀ごろに活動した、ユダヤ教の指導者ネヘミヤの物語です。その物語を一言でいえば「イスラエル再建の物語」です。「ネヘミヤ記」は、それをイスラエルの歴史を描きながら語ります。その語りの中で、バビロニアからの解放、神殿再建、神殿を守る城壁の完成、律法の公布と歴史的出来事を描いていきますが、最終的な目標は、イスラエルのすべての民が律法に聞き従うことです。そこまで行われなければ、イスラエルの再建は完成しないと主張します。言い換えれば、城壁が再建された、神殿が再建された、それだけではイスラエルの再建ではないのです。

約2500年前のイスラエルの出来事と、21世紀のわたしたちを単純比較はできませんが、コロナ禍が終わりつつある今、ただ3年前に戻ればよいわけではない、と示されているように思えます。

本日の箇所ではイスラエルの人々は、律法に聞き従うがために、まず歴史を振り返り、主なる神様に悔い改めています。仮庵の祭りを行った後、その月、イスラエルの人々は集まって、断食や異邦人と接しないなど自粛の生活をしました。そして、律法を朗読して、自らの罪を告白したのでした。

聖書日課は、「**あなたのみが主**」という呼びかけから始まりますが、文脈としては「**立って、あなたたちの神、主を賛美せよ。とこしえより、とこしえにいたるまで栄光ある御名が賛美されますように。いかなる賛美も称賛も及ばないその御名が**」(9:5b) から始まっています。この最初の「**御名が賛美されますように**」の部分がないと、「**あなたのみが主**」という部分の意味が分かりません。なぜならば、「**主**」という部分には、主なる神様の名前、みだりに呼んではいけない名前があるからです。すなわち、漠然とではなく、「**主**」という名前の方のみが、自分たちの神様であると宣言しているのです。

さて聖書は、「**天とその高き極みを、そのすべての軍勢を、地とその上にあるすべてのものを、海とその中にあるすべてのものを、あなたは創造された**」と続きます。「**軍勢**」という言葉はありますが、天地創造の出来事を語っています。そして、そのあと、アブラハムの出来事、出エジプトの出来事、そして「**あなたの聖なる安息日を布告し僕モーセによって、戒めと掟と律法を授けられた。彼らが飢えれば、天からパンを恵み渴けば、岩から水を湧き出させ必ず与えると誓われた土地に行ってそれを所有せよと命じられた**」(9:14-15) と語り、律法の授

与と主なる神様が与えると約束されたと、カナンの土地取得までを振り返っています。聖書日課は、そこで終わりですが、そのあとイスラエルの罪の告白が続きます。そしてそこで「しかし、あなたは罪を赦す神。恵みに満ち、憐れみ深く忍耐強く、慈しみに溢れ」(9:17)、「まことにあなたは恵みに満ち、憐れみ深い神」(9:31)と、主なる神様がどういう方であるかの確認がなされます。

この「ネヘミヤ記」は、自分たちの過去の歴史を振り返り、反省し、現代の生き方に生かすということの大切を示しています。現代でも、そのような意味で歴史を学ぶことの大切さが言われます。しかし、そう簡単に歴史を学ぶことの大切さを一般的な真理のように考えてよいのかとも思えます。「ネヘミヤ記」が主張する歴史の大切さは、主なる神様を信じるがゆえに真理であるからです。歴史を記すという作業は、人間がそれを記述する以上、その人間が一つの観点に基づいて作り上げるフィクションであることを忘れてはなりません。文化、時代によって歴史記述は異なり、歴史観の違いは、対立を生むのです。

「ネヘミヤ記」は、主のみ神様とすること、という視点に立ちました（これすらも一つの文化によるといえるのですが、しかし、だからこそ人間の一つの観点を超えるのですが）。そして、自分たちの歴史の根底において、主なる神様が何を考え、何をわたしたちに人間に求めておられるのかを知ろうとしました。それは、いろいろな観点で存在するそれぞれの文化による歴史から学ぶことと同時に、歴史を超えて学ぶことの大切さを示しています。本日の福音書、「ヨハネによる福音書」もこの視点に立っています。

本日の福音書で、イエス様は、ファリサイ派の人々に「わたしは羊の門である」と語ります。物語は、生まれつき目が不自由な人を、イエス様が「神の業がこの人に現れるためである」と言って癒される物語の続きですが、突然、始まりますので、とても続いているようには思えません。物語の世界の中でも「イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった」(10:6)とある通り、聞いた登場人物のファリサイ派の人たちも、何のことかわからなかったようです。イエス様は、わからないままにいるファリサイ派の人たちに、何も説明することもなく、「イエスはまた言われた。『はっきり言うておく。わたしは羊の門である』」と話を続けるのです。

このような唐突さは、イエス様とは誰か、あるいは自分たちにとってどのような意味の方か、それを悟ればよいとしています。先ほどの歴史を振り返りながら何かを示そうとしている「ネヘミヤ記」と対照的といえるかもしれませんが、「神の憐み、忍耐深さ、慈しみ」を示している点では同じです。それらが永遠の命を約束する禍です。

コロナ禍は終わりつつあり、気候も今は穏やかです。ことにわたしたちの教会は、23区にありながら、緑の木々ときれいな花々があり、そして鳥たちのさえずりが聞こえる、なんとも平和な環境です。しかし、国外では戦いと武力衝突が続く、そのような戦いがわたしたちの近隣でも起こる可能性が高まりつつあります。だからこそ、歴史を踏まえつつも歴史を超えて、すべての人を愛そうとされている「主なる神様」を強く信じ続けたいと思います。そして、わたしたちもその信じる者の歴史を記し続けたいと思います。